執筆者紹介（執筆順）

荒　賀　文　子　　神戸女学院大学文学部総合文化学科助教授（社会福祉学）
小　松　秀　雄　　神戸女学院大学文学部総合文化学科教授（社会学）
川　合　真一郎　　神戸女学院大学人間科学部人間科学科教授（環境科学）
丸　島　令　子　　神戸女学院大学人間科学部人間科学科教授（臨床心理学）
難波江　和　英　　神戸女学院大学文学部総合文化学科助教授（英文学）
大　竹　恵　子　　神戸女学院大学大学院人間科学研究科博士後期課程
島　井　哲　志　　神戸女学院大学人間科学部人間科学科教授（心理学）
三　浦　欽　也　　神戸女学院大学人間科学部人間科学科助教授（人工知能）

高　橋　友　子　　神戸女学院大学文学部総合文化学科助教授（西洋史）

石　川　康　宏　　神戸女学院大学文学部総合文化学科助教授（経済学）
古　田　敦　子　　神戸女学院大学文学部総合文化学科2001年３月卒業
芳　野　祥　子　　神戸女学院大学文学部総合文化学科2001年３月卒業

Contributors

ARAGA Fumiko	Associate Professor of Kobe College, Department of Intercultural Studies (Social Welfare)
KOMATSU Hideo	Professor of Kobe College, Department of Intercultural Studies (Sociology)
KAWAI Shin'ichiro	Professor of Kobe College, Department of Human Sciences (Environmental Science)
MARUSHIMA Reiko	Professor of Kobe College, Department of Human Sciences (Clinical Psychology)
NABAE Kazuhide	Associate Professor of Kobe College, Department of Intercultural Studies (English Literature)
OTAKE Keiko	Graduate Student of Kobe College (Human Sciences)
SHIMAI Satoshi	Professor of Kobe College, Department of Human Sciences (Psychology)
MIURA Kinya	Associate Professor of Kobe College, Department of Human Sciences (Artificial Intelligence)

TAKAHASHI Tomoko	Associate Professor of Kobe College, Department of Intercultural Studies (Western History)

ISHIKAWA Yasuhiro	Associate Professor of Kobe College, Department of Intercultural Studies (Economics)
FURUTA Atsuko	Graduate of Department of Intercultural Studies, Kobe College, 2001
YOSHINO Sachiko	Graduate of Department of Intercultural Studies, Kobe College, 2001

編集後記

2001年の後半は「テロとその報復」、「狂牛病問題」などで過ぎ去り、今もなお続いている。マスコミが取り上げることの大半は、暗い、不愉快そして悲惨なことである。本号の特集は「楽しく老いる」であるが、世の中のいろいろな動きを見ていると、すんなりと「楽しく老いる」のはなかなか難しそうである。しかし、ある程度は努力によって（意図的にというべきか）日々を楽しくすることが可能である。スペースの関係上、詳しくは紹介できないが、ノーマン・カズンズの「笑いと治癒力」によると、笑いとユーモア、生への意欲が奇跡を起こすのである。(K. S.)

人口統計には「頑固な社会的規則性」があり、日本の少子化と高齢化の趨勢は個人の意志や創意工夫だけでは変更できないようである。現在の人口の規則性が続くかぎり日本の人口は今世紀中に半減し、高齢者の人口は40%前後に達するかもしれないという。人口問題は男女の出会いから始まる結婚と出産、さらに教育、福祉、経済に関わる大きな社会問題であり、女性学の重要なテーマにもなるだろう。(K. H.)

本号の特集テーマは若手、気鋭のM編集委員の提案で誠にユニークなものとなりました。寄稿論文は特集、特集外を問わずそれぞれ力作で興味深く、ご同慶の至りです。故頼藤、元編集委員の著作の書評は多くの方が読まれることと期待されます。今回も残念なことに学生懸賞論文の最優秀作を我々のもとで編集できませんでした。来年は是非に。豊福さんの熱意と編集にかかわる類稀な力量に感謝いたします。(M. R.)

編集会議の場でまったくの思いつきで口に出した「楽しく老いる」というテーマが、どういうわけか採用されてしまいました。一時はどうなることかと思いましたが、なかなか興味深い原稿が集まったようで、ほっとしています。厳密には女性学ではないのかもしれませんが、こういうテーマも悪くないと思います。いささか手前味噌ではありますが…。(M. K.)

今回の特集は「楽しく老いる」。わたしも、まわりからは「まだ早い」と言われながら、そろそろ老後が気になってきた。老化は性別とは関係なくやってくる。しかし老後の過ごし方は、おそらく男女では異なるだろう。それまで女として、男として、それぞれ生きてきたのだから。いずれにしても「楽しく老いる」ためには、老いるまでの生き方が問題になってくる。20世紀が生きづらい時代だったとすれば、21世紀は死にづらい時代だ。(N. K.)

「女性学評論」への投稿に関する規程

（1992年４月24日
女性学インスティチュート総会制定）

第１条　この規程は、「女性学評論」への投稿について必要な事項を定めるものとする。

第２条　「女性学評論」への投稿資格を有する者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

(1)　神戸女学院大学（以下「本学」という。）の専任教員

(2)　女性学インスティチュート所員が推薦する次のいずれかの者

イ　本学非常勤講師

ロ　本学教学職員

ハ　本学大学院修了生

ニ　本学大学院在学中の者で修士の学位を有する者

ホ　本学卒業生で修士の学位を有する者

ヘ　編集委員会で認めた者

第３条　投稿の採否は、編集委員会が決定する。

第４条　編集委員会は、第２条に規定する者以外の者による原稿の執筆が望まれると判断した場合には、その者に原稿の執筆を依頼することができる。

附則：この規程は1992年４月24日から施行する。

附則：この規程は1993年４月１日から施行する。（1993年３月22日改正）

神戸女学院大学 女性学評論 第16号

印　　刷　2002年3月30日
発　　行　2002年3月31日
発 行 人　川合真一郎
編集委員　川合真一郎、小松秀雄、丸島令子（委員長）、
　　三浦欽也、難波江和英　　（アルファベット順）
題　　字　溝口芳子
発 行 所　神戸女学院大学女性学インスティチュート
　　〒662-8505 西宮市岡田山4-1
　　TEL 0798-51-8545
印 刷 所　尼崎印刷株式会社
　　〒661-0975 尼崎市下坂部3丁目9番20号
　　TEL 06-6494-1122